

み

聲音にして單子音の一つ。

み 身(名)

「一」からだ。●身體。「二」これのからだ。●自身。「三」魚肉。○「鯛の身」「刺身」「四」附屬物に對して其正味大切の部分。○「刀の身」「蓋物の身」

「一」植物の種。又は種を含める肉塊。「二」實の如く正味大切の部分。○「實のある文章」

み 實(名)

農具の名。穀類を鋏て殻、塵などを除き去るもの。

み 箕(名)

十二支の一つ。……巳の時は午前十時。巳の方角は東南の南によりたるかた。

み 巳(名)

目下の人に對して用ふる詞。●われ。●おれ。

み 身(代)

尊稱形容詞。「一」古ばおんこなどいふべき處すべて之を用ひたり。「二」今は多く神聖

み 御(形)

嚴格なる名詞の上に特に冠らせて用ふ。○「御代」「御靈」「御興」「御酒」「御神」「三」たゞ美稱として用ふ。●眞に同シ。○「み草」「み

み 三(數)

山「み吉野」「み熊野」みつ。●さん。

み (後)

「一」形容詞の語尾となりてさに故にの意をあらはす詞。○後撰「秋の月光さやけみ」やけさに。又さやけき故に。もみち葉の落つる影さへ見えわたるかな「二」甲動詞と乙動詞との下に並び置きてたりの意をあらはす詞。○伊勢「河内の國生駒山を見れば曇りみ晴れみ」曇つたり晴れたりして。立ち居る雲やます

御井(名) 井の尊稱。又は美稱。○萬葉「山の邊の御井」藤原の御井

みいろぐみ 三色組(名) 白・赤・青の三色を交へ組みたる紐。烏帽子の頂頭懸に用ふるもの。

みいる 見入(他動四段) 眼又は心を留めてよく見る。

みいる 見入(他動下二段) 外より見込む。

みいる 見入(自動下二段) 惡魔などが其人を見込みて附く。

みいつ 御威(名) 御威光。

みいら 木乃伊(名) 人の屍體の數年經て乾き焦れ黒燒の如くになりてひらびたるもの。取れて

藥用に供す。……紅毛雜話に曰く「蠻書の説

に曰く。埃及の國內アレキサンデリア云

ふ處あり。此地甚だ豊饒にして人民殊に至

孝なり。人死すれば其腸を抜き去りてこれ

にかゆるに種々の藥品を以てし。布帛を以

て屍に纏ひ是を浸すに上好の脂油を以て製

したる藥汁を用ひ。棺に納めて窖の中に埋

む。是れ死骸をして千歳朽損せざらしめん

が爲なり。此屍年月を歴れば上等の藥とな

る。是則木乃伊なり。さるによりて土人等

星移り物換はりて人も問ひ來ぬ古墳をあば

き。棺をくだきて其屍を得。交易して能き

價を得となり。蠻語にてはモミイといふ。

唐土にも木乃伊と書くは音譯なり。ミイラ

といふは日本の俗言なり」

彌勒(名) 佛の名。釋迦入滅の後無量の年數を

經て此世界に現出するといふ佛。

彌勒の世(名) 彌勒の出世するといふ將來

永久の時代。

見張(他動四段) 「二」目を強く開きて見る。

「二」見て番をする。

みはるかす

見響(他動四段) はれ／＼と遠く見わたす。○祝詞式「皇大神の見はるかします四方の國は」

方(名)

みはから

見計(他動四段) 見て積る。●見て適當に處置する。●みつくるふ。

みはかやま

御墓山(名) 御墓のある山。(玉葉)

みはかし

御佩(名) 御太刀。

みはたばり

身幅(名) 身一幅、左右の袖各二幅の長さを合はせて云ふ詞。●ゆき。

みはつ

見果(他動下二段) 終まで見送ぐる。●見さける。

みはなつ

見放(他動四段) 見捨つる。●思ひ捨つる。●放念する。

みはらし

見晴し(名) はれ／＼と四方を見渡す事。ながめ。●眺望。

みばえ

實生(名) 植物の種より發生する事。見映(名) 見て美しさの一層増す事。

みばえ

御階(名) 階の敬語。

みはし

醜(形。形狀言ク活) 見る事の厭はる。●容貌のわるき。●不器量である。

みはくし

見惡(形。形狀言ク活) 見え難し。●よく見え

みはくし

見惡(形。形狀言ク活) 見え難し。●よく見え

みはくし

見惡(形。形狀言ク活) 見え難し。●よく見え

みはくし

見惡(形。形狀言ク活) 見え難し。●よく見え

みはくし

見惡(形。形狀言ク活) 見え難し。●よく見え

みはくし

見惡(形。形狀言ク活) 見え難し。●よく見え

みはくし

見惡(形。形狀言ク活) 見え難し。●よく見え

みはくし

見惡(形。形狀言ク活) 見え難し。●よく見え

みはくし

見惡(形。形狀言ク活) 見え難し。●よく見え

る。

みほん

見本(名) 物の全體を見る代りとする其一部分の雛形。

みほめ

身寧(名) 自慢。(枕)

みど

水門。水戸(名) 「二」内海の外海へ通する口。瀬戸。「二」湊。

みど

御戸(名) 神前佛前の扉。

みどく

見届(他動下二段) しかと認むる。●たしかに見送る。

みどり

見取(名) 看病。●看護。●介抱。

みどり

緑。翠(名) 黄と青との合ひたる色。●萌黄。

みどりのばやし

緑林(名) 盜賊の異名。●支那後漢の世緑林といふ地に賊の起りたるよりの名。○夫木「早過ぎに人の心ばよこた山みどりのばやし陰にかくれて」

みどりのそで

縁の袖(名) 六位の袍。(雅)

みどりこ

緑兒(名) 乳を呑む頃の小兒。●赤兒。●嬰兒。●孩兒。

みどる

見取(他動四段) 看病する。●看護する。●介抱する。

みどる

(自動下二段) 心を吸ひ取らるゝ程に見る。●

みどほす

見通(他動四段) 底まで見る。●奥まで見る。●見抜く。

みどがむ

見咎(他動下二段) 見て咎むる。●見てあやしむ。

みどらし

御執(名) 御号。

みどむ

認(他動下二段) 「二」見付くる。「二」承知する。●認可する。

みだう

御堂(名) 佛像を祭り置く堂。●本堂。●お堂。(名) みとのまぐはひの詠り。

みとのまぐはひ

(名) 男女の交合。(記)

みどく

御徳(名) おかげ。●御恩。○落窪「まい母かく子どもの喜びをしけるを御徳と喜びければ」

みどころ

見所(名) 「二」見るに適當なる場處。又は頤合。「二」見るべき點。●見込ある點。

みどき

蒼鷺(名) 青鷺の古名。(和名抄) 蒼鷺(名) さきの敬語。●精進の膳。●僧膳。

みどき

(雅) 折よく。●機會よく。●機嫌よく。

みどきよく

……御時よくの意なれば貴人の上ならでは

みとしろ

御戸代(名) 「一」神前佛前に垂れたる戸帳。

みとも

身共(代) 我等。此方。拙者。……目下の人にふ詞。

みち

道(名) 「一」往來する處。道路。二」路を歩行する間。途中。三」人として必ず行ふべき筋。四」術。法。仕方。

みち

海驢(名) 海獸の名。海獺の類。

みち

蜜(名) みつに同じ。(雅)

みちばた

道端(名) 路傍。

みちはし

道橋(名) 「一」道となるべき橋。二」道や橋や。……(雅)

みちかひ

道交(名) 道にての行き違ひ。

みちがし

身近(形。形状言ク活) 身に近し。傍にあら。

みちづれ

路連(名) 連れ立ちて道を行く事。又は其人。

みちづら

道面(名) 道の面。

みちなか

道中(名) 途中。……だらう。

みちん

微塵(名) こまき塵。極めて小さきもの。

みちんに

微塵(訓) 微塵の如く粉な／＼に。

みちのべ

道邊(名) 道のはざり。路傍。

みちのり

道程(名) 道の長さ。距離。里程。

みちのなが

道中(名) 國の名にいふ古稱。中の字の意味。越中は「こしのみちのなが」備中は「き

びのみちのなが」さいふ類。

みちのくち

道口(名) 「一」國の名にいふ古稱。前の字の意味。……肥前は「びのくにのみちのくち」越前は「こしのくにのみちのくち」さいふ類。二」備馬樂の曲名。

みちのくがみ

陸奥紙(名) 檀紙の古名。もと陸奥國より産せし故の名。

みちのころろ

道の心(名) 佛に歸依する心。……だらうしん。○新六帖「からくして入りしは何ぞ幸の門道の心よそのころろしあれ」

みちのき

道の記(名) 旅行中見聞の事柄を記したる文章。旅行記。紀行。

みちのし

道師(名) ちばねの一つ。

みちのしり

道後(名) 國の名にいふ古稱。後の字の意味。……肥後は「びのくにのみちのしり」越

後は「こしのくにのみちのしり」といふ類。

みちくらべ

路競(名) 走り競べ。●かけくら。●競走。

みちくさ

路草(名) 「一」路傍に生えたる草。「二」路を

行きながら遊ばざして時を移す事。

みちあへのまつり

道饗祭(名) 古へ六月晦日京都の四

方に於て疫神の入り来るを防ぐため。行は

れし祭。其來らんとする道にて饗し歸すの

意にて名づけたリ。

みちゆき

道行(名) 「一」道を行く事。「二」謡曲にて旅

行する道中の状態風景などを作りたる文

句。「三」芝居にて二人(おもには情郎情婦)

打連れ旅行する様を演ずる事。

みちゆきうら

道行占(名) 道を行きながらする一種の

占。(萬葉)……橋占などの類。

みちゆきぶり

道行觸(名) 道行くたより。●道のついで。○躬恒集「こそさらに見にこそきつれ

櫻花みちゆきぶりと思はざらん」

みちゆきびと

道行人(名) 道を行く人。(雅)

みちゆきすり

道行摺(名) 道を行きながら左を摺る

事。○新六帖「霜さゆる鴨の河原に駒なべ

て道ゆきすりの山藍の袖」

みちみちし

道々し(形。形状言シク活) 教訓めきたる。

●「たくるしき。○源氏「三史五經の道々

しき」

みちしば

道芝(名) 路傍に生ずる芝。又は他の總べて

の草。

みちしるべ

道導(名) 「一」道の方角を記したる木。又

は立石。「二」道を案内する事。「三」虫の名。

道教へ。

みちしるべ

(名) 道案内。

みちしほ

満沙(名) 満ち来る潮。

みちひ

満干(名) 沙の満つる事と引く事と。又其時刻。

みちび

道火(名) 鐵砲火花などにて火の中に導くため

の火。

みちびなほ

道火繩(名) 道火のために設くる火繩。

みつびく

導(他動四段) 道の案内をする。●先導する。

みちもり

●道を教ふる。●手引する。

みちもせ

道幸(名) 道路の番をする事。又は其人。●

ちり。

みちもせ

路の狭き程。●路一面。(形)―道もせの。

(副)―道もせに。○千載「吹く風をなこそ

の關さ思へどもみちもせに散る山櫻かな」

みちすがら

(副)

道を行く間すべて。●出づるより行

き着くまで。○千載「道すがら心も空にな

がめやる都の山の雲がくねぬ」

みりん

味淋(名) 糯米と麴と焼酎を以て醸したる甘味

の酒。

みぬく

見抜(他動四段)

見極むる。●見通す。

みる

海松(名)

〔一〕海草の名。緑色にて枝多きもの。

●みるめ。●うみまづ。〔二〕染色の名。黒

みを帯びたる緑色。木賊色に同じ。

みる

見。視。観。看。覽(他動一段)

〔一〕目にうつして知

る。●視力を働かす。〔二〕取り抜く。●世

話する。〔三〕見て思ふ。●見て考ふる。〔四〕

試むる。

みるのまゝ

海松丸(名)

古代模様の名。

みるふさ

海松を丸くしたるもの。(圖)

みるふさ

海松房(名) 海松の房になり

たるもの。

みるめ

海松布(名)

海松に同じ。

みるめかぐはな

見る目嘆ぐ鼻(名)

闇窟の廳にありて

一は亡者の罪惡を目にて見出だし一は鼻に

て嗅き出だすさいふもの。頭二つ並びて常



に王の傍にあり。

みるみる

(副)

見ながら。●見る内より。●見す。

みる

澤(名)

川又は川尻にて船の通ふ一脈の水路。●

みよ。

みおぼえ

見覺(名)

一度見て心に覺え居る事。

みなつくし

澤標(名)

澤の筋を示すための杭。●みな

じろし。●みなぐひ。

みなぐひ

澤杭(名)

みなつくしに同じ。

みおくる

見送(他動四段)

別る。人を送る。●見立つ

みる

澤水(名)

みなつくしに同じ。

みなぎ

澤標(名)

みなつくしに同じ。

みなじろし

澤引の船(名)

大船の先に立ちて水先

みなびきのふね

案内をする船。(和名抄)

みおも

身重(名)

みもち。●姫身。●懷妊。

みわ

(名)

〔一〕酒を醸す器。〔二〕神に供ふる酒。……

(古)

みわた

水曲(名)

水の流れて折れ曲がるころ。○千

載「泉川水のみわたのふしづけに岩間の水

る冬は寒にけり」

みわたす

見渡(他動四段)

遠く廣く見遣る。

みか 藥(名) 酒を入るゝ瓶。(古)

みか 三日(名) 「一」三晝夜。●三晝。「二」月の第三日

目。

みかい 未開(名) いまだ開けぬ事。△(形)「未開の。

みかど 御門(名) 「一」皇居の御門。●禁門。「二」皇居。

●宮城。●宮殿。●朝廷。「三」(帝)天皇陛下。

みかどながみ 帝拜(名) 朝拜の古名。

みかどまつり 御門祭(名) 古へ六月十二月禁中に於て

行はれし門の神の祭。

みがほし (形)形状言シク活) 見たし。●常に見て居た

き程に思はるゝ。○萬葉「飛鳥の舊き都は。

山高み川さほじろし。春の日は山し見かは

し。秋の夜は川しさやけし」

みかは 御義(名) みかはみづに同じ。

みかはり 身代(名) 人の身の代りを務むる事。……多

く君國のため死ぬる時などに云ふ。

みかはやうど 御廁人(名) 禁中の御廁の掃除など掌

る下婢。

みかはまんざい 三河萬歳(名) やまこまんざいを見

みかはみづ 御講水(名) 皇居の周圍を流るゝ講。

みかはす 見夾(他動四段) 互に見る。●見合ふ。

みかた 味方(名) 「一」我と利害を同じくするもの。●

仲間。●組。「二」特には我軍。

みかつき 三月月(名) 「一」陰曆の三日の夕に見ゆる

月。「二」三月月の形に似たるもの。

みから 身柄(名) 身の程。●身分。

みかん 蜜柑(名) 木の名。柑類の中こに甘味なる實

のなるもの。

みかむのこ 御巫子(名) みかんこに同じ。

みかんこ 御巫子(名) かんなきの尊稱。

みかのほらみてならべ 蜜腹竊並(名) 神酒を饗に一杯

満たせて神前に置き並ぶる事。(祝詞式)

みかのへたかしり 蜜上高知(名) 神酒を盛りたる藥を

高く著く神前に供へ置く事。(祝詞式)

みかく 見掛(他動下二段) 見付くる。●認むる。

みかく 琢磨(他動四段) 摩りて美しくする。●さ

ぐ。

みがくる 水隠(自動下二段) 水の中に隠るゝ。(雅)

みかまき 御竈木(名) 「一」御薪。「二」古へ正月十五日

に佳例として百官の禁中に奉りたる薪。又

司るもの。……古今榮雅抄に曰く「戀しき人を夢に見んと思へば双盤を枕にして念すれば必ず夢に見ゆ」と
名帳(名) 死者の名を寺に扣へ置く帳簿。●過去帳。

みやみょうてう 明朝(名) 明日の朝。

みやみょうり 名利(名) 名譽と利欲と。●めいり。

みやみょうり 冥利(名) 神佛の賞譽によりて受くる幸福。

みやみょうわちう 明王(名) 五大明王を見よ。

みやみょうが 茗荷(名) 草の名。葉は生薑に似て芽は香氣よく食用となるもの。

みやみょうが 冥加(名) 神佛の加護又はそれにより得たる利益。

みやみょうかん 冥感(名) 神佛の感じ給ふ事。

みやみょうだい 名代(名) 他人の代理。

みやみょうくわん 冥官(名) 地獄の役人。罪惡ある死者を懲罰するもの。

めいようやく 妙藥(名) 不思議なる程よく利く藥。●良藥。

めいけん 妙見(名) 佛の名。北斗星を祭りたるもの。

みやみょうぶ 命婦(名) 古へ五位に叙せられたる女官の稱。

みやみょうぶ 名薄(名) なつきに同じ。

みやみょうぶ 明後日(名) 明日の明日。あさって。

みやみょうがう 名號(名) (一)南無阿彌陀佛といふ佛名。(二)名號を口にて稱ふる事。●念佛。

みやみょうがう 名香(名) 上等の薰物。

めいようでん 妙典(名) 法華經に同じ。(佛教)

みやみょうぎやう 明經(名) 中古大學寮の二科目。六經(周易、尚書、周禮、儀禮、禮記、毛詩)一傳(左氏傳)を主とし論語、孝經を兼修するもの。

めいようぎやう 妙經(名) 法華經に同じ。(佛教)

みやみょうぎやう 明經博士(名) 中古大學寮の官名。明經を教授するもの。

めいようみ 妙味(名) すぐれたる味。

みやみょうじ 名字(名) (一)姓名。(二)苗字に同じ。

めいようじ 苗字(名) 一族の名。●氏。……足利、新田、徳川の類。

めいようじ 冥助(名) 冥加に同じ。

みやみょうじ 明星(名) 金星の一名。宵の星と

暁の明星と。

みゃうじん

明神(名) 〔一〕古は名神の借字。〔二〕後

世は神の美稱。

みゃうじん

名神(名) 中古朝廷より定められたる神社の資格。全国中特に名たゝる神に附けられたる尊爵。

みゃうじんたい

名神大(名) 名神の中にて特に重大なる祭式に與かり給ふ神の稱。(延喜式)

みゃうもん

名聞(名) 名譽を求むる事。

みゃうもく

名目(名) 名稱。

みゃうせんじしやう

名詮自注(句) 名義と實際とが違はぬ事。

みゃうせき

名跡(名) 家名。●家督。

みよのほぢ

三世の佛(名) 釋迦、阿彌陀、彌勒。(佛教)

みよのし

三世の師(名) 三世の佛に同じ。(佛教)

みよし

船首(名) 船の軸先に突き出でたる木。

みだ

彌陀(名) 阿彌陀に同じ。(佛教)

みだい

御臺(名) 〔一〕古へ貴族の食物を載せたる臺。今の膳に當るもの。〔二〕食事。●御膳飯。

〔三〕みだいに。

みだいどころ

御臺所(名) 大臣、大將、將軍家の奥方。

みだり

妄。漫。猥(名) 亂暴。●不規律。●むやみ。△(形)―みだりなる。(副)―みだりに。

みだりがはし

(形。形狀言シク活) みだりなる有様。

みだりかくび

病。●脚氣。(源氏) 何となく苦しき足の病。

みだりかせ

亂風(名) 何となく風邪の心地する病。

みだりむね

亂胸(名) 何となく苦しき胸の病。●胸痛。

みだりごち

事。亂心地(名) 何となく氣分のすぐれぬ事。

みだりあし

亂足(名) みだりあしのけに同じ。(源氏)

みだりあしのけ

亂足(名) みだりかくびやうに同じ。(空穗)

みたる

亂(他動四段) 亂すの古格。

みたる

亂(他動下二段) 〔一〕不規則になる。●亂雜になる。●入り交る。〔二〕戦争の世となる。

みだれ

亂(名) 〔一〕亂るゝ事。〔二〕競争。

みだれはこ

亂箱(名) うちみだりの箱に同じ。

みだれがはし

(形。形狀シク活) みだりがはしに同じ。

みだれやき

亂焼(名) 刀の焼刃の一種。あやの亂れたるもの。

みたつ

見立(他動下二段) 「一」人の出立を見送る。
「二」見て適當なるものを撰ぶ。「三」見て類
似のものに比する。

みたらし

御手洗(名) 神社の境内を流るゝ川。

みたやもり

御田屋守(名) 神田などの番人。

みたま

御靈(名) 神佛、死者の靈。

みたまのふゆ

恩頼(名) 神又は君の恩徳。

みたけさうじ

御嶽精進(名) 吉野金峯山の信者が精進
潔齊して祈る事。

みたけまうで

御嶽詣(名) 吉野金峯山へ參詣する事。

みたえ

水絶(名) 水の絶ゆる事。○六帖「天の川みだ
えもせなん鵲の橋もわたさでたゞ渡りな
ん」

みたて

見立(名) 見立つる事。

みたて

見立(名) 見ばえ。●見がひ。

みたて

見立(名) 見ばえ。●見がひ。

みたて

見立(名) 見ばえ。●見がひ。

みたて

水絶(自動下二段) 水の絶ゆる。○公任集「白
川のながれて今日を忘れめやみだえて淺き
瀬さはなるさも」

みたて

水絶(自動下二段) 水の絶ゆる。○公任集「白
川のながれて今日を忘れめやみだえて淺き
瀬さはなるさも」

みたて

水絶(自動下二段) 水の絶ゆる。○公任集「白
川のながれて今日を忘れめやみだえて淺き
瀬さはなるさも」

みたて

水絶(自動下二段) 水の絶ゆる。○公任集「白
川のながれて今日を忘れめやみだえて淺き
瀬さはなるさも」

御民(名) 天皇陛下の臣民。○萬葉「御民われ

みだし

生けるしるしあり天地の榮ゆる時に逢へら
く思へば」

みだし

見出(名) 「一」探し出す事。「二」見出すに便利
なるやう作りたる目次の類。●索引。

みだし

満(他動四段) 満たしむる。●一ぱいにする。

みれん

亂(他動四段) 亂れしむる。

みそ

未練(名) 「一」未熟。●不慣。「二」あきらめの
つかぬ心。

みそ

味噌(名) 食品の名。大豆と麴とに鹽を加へ白に
て搗き交ぜたるもの。

みそ

三十(數) さんじふ。

みそ

溝(名) 「一」小工の小川。「二」溝の如く細長く堀
りたる筋。

みそ

御衣(名) 衣服の敬語。●おめし。

みそ

三十(數)(名) 「一」みそ。●さんじふ。「二」三
十歳。

みそ

雲(自動下二段) 雲の降る。

みそ

三十日(名) 「一」三十晝夜。「二」月の最終日。

みそ

●つこもり。

みそ

密 ひそかに同じ。(形) ひそかなる。(副) ひ
そかに。

みそ

密 ひそかに同じ。(形) ひそかなる。(副) ひ
そかに。

みそ

密 ひそかに同じ。(形) ひそかなる。(副) ひ
そかに。

みそ

密 ひそかに同じ。(形) ひそかなる。(副) ひ
そかに。

みそ

密 ひそかに同じ。(形) ひそかなる。(副) ひ
そかに。

みそかを

密男(名) まなこ。●密夫。

みそかけ

御衣懸(名) 貴人の衣を懸くる衣桁。

みそかごと

密事(名) 「一」秘密の事。「二」特には男女の私通。

みぞれ

霰(名) 雨交りの雪。●牛は雨になりたる雪。

みそなばす

(他動四段) 見給ふ。●御覧になる。

みそなへ

(自動) 見そなはせの約音。●見給へ。○新古今「法の丹さしてゆく身ぞもろく」の神も佛も我を見そなへ」

みそら

御空(名) 空。●虚空。

みそむ

見初(他動下二段) 始めて見る。

みさう

御庄(名) 中古皇室の御領地。又は貴族の領地。

みさう

未曾有(名) 今までに例の無き事。△(形)「未曾有の」。

みそう

(名) 雑炊。(雅)

みそう

(自動四段) 御祓をする。

みそし

味噌漉(名) 篩の一種。木の曲げものに小さき目の網をはり味噌汁の滓を去るに用ふるもの。

みそし

鷓鴣(名) 鳥の名。雀に似て少し小さく巢を作る事の巧なるもの。

みそし

みそぎ

御祓(名) 「一」神事に關する時又は身に穢ある時など水にて身體を清むる事。「二」特には六月祓。

みそぎ

みそひどもし

御祓川(名) 六月祓を執行する川。

みそびつ

三十一字(名) 短歌の異名。

みそびつ

御衣櫃(名) 貴人の衣を入れる櫃。

みそびつ

御衣桶糶(名) 衣に附けたるひめのり。(枕)

みそびつ

三十文字鎖(名) 短歌を作る事。○月詣集「そさのをの三十文字ぐさりする人は出雲路よりや過ぎて來つらん」

みそもじ

蜜(名) 蜂蜜。

みそもじ

三(數) 一に二を加へたる數。●さん。

みつ

満。充。盈(自動上二段。古は四段) 空處が無くなる。●十分になさ。●充滿する。

みつ

充。滿(他動下二段) 満たしむる。●一杯にする。

みつ

水(名) 「一」海川などに充ちて流るゝものゝ總名。「二」特には鹽氣を含まぬもの。●眞水。

みつ

●淡水。「三」時としては流動體の總名。「四」洪水。

みそもじ

名。

みそもじ

短歌の異

みそもじ

三十餘一文字(名)

みそもじ

短歌の異

みそもじ

短歌の異

みそもじ

短歌の異

みそもじ

短歌の異

みそもじ

短歌の異

みそもじ

短歌の異

みそもじ

短歌の異

みそもじ

短歌の異

みそもじ

短歌の異

みそもじ

短歌の異

みそもじ

短歌の異

みそもじ

短歌の異

みつ

瑞(形)

うるはしく充滿したる有様。○「瑞穂」瑞山「瑞籬」(又)一瑞の。○祝詞式「瑞のみあら」

みづいろ

水色(名)

藍の最も薄き色。

みづいはひ

水祝(名)

古代の俗。正月の年始に新婚せし男の來る時待ち構へて水を掛け祝ふ事。

みづいれ

水入(名)

硯の水を入れ置く器。

みづば

三葉(名)

芹の一種。一本の莖より葉の三つ出で食用となるもの。

みづは

閼象(名)

水を司る神の名。(紀)

みづばよつば

三端四端(句)

三棟四棟。多くの宮殿の立ち續けるさま。○古今序「此殿はうべも富みけりさき草の三つは四つはに殿造りせり」

みづはのめ

閼象女(名)

みづはに同じ。

みづほ

瑞穂(名)

よく實のりたる稻の穂。

みづほ

(名)

水上に丸く浮ぶ泡。(萬葉)

みづほのくに

瑞穗國(名)

我日本國の美稱。

みづほし

三星(名)

紋の名。星を三つ畫がきたるもの。(圖)

みづどり

水鳥(名)

水に住む總べての鳥。●水禽。



みづどりの

水鳥の(枕)

鴨青羽浮寐立つなどすべて水鳥に縁ある詞の枕詞。(萬葉)

みづどけ

時計(名)

古代の時計。一の器に水を盛り少しづつ漏らし其減する分量によりて時刻を計るもの。●漏刻。

みづどもゑ

三巴(名)

紋の名。玉の三つある巴。

みづち

蛟(名)

龍の一種。水に住むもの。

みづちやナヨウ

水帳(名)

田の反別など記したる帳簿。

みづてヨウシ

水調子(名)

三味線の調子。極めて低きもの。

みづちや

水茶屋(名)

往來の人に茶、水など飲まする店。

みづおち

水落(名)

「一」水の高處より落つる事。「二」胸部の下、臍の上の凹みたる處。●みぞおち。

みづなけ

水桶(名)

「一」水汲む桶。「二」能道具の名。水桶に摸したるもの。(圖)

みづはツグミ

(自動四段)

甚しく老ゆる。

○源氏「惟光の父の朝臣の乳母にて侍りし



ものゝみつはぐみて住み侍るなり」

みつはりさす

(自動四段) みつはるゝに同じ。○續世繼

「みつはさしたる姫の杖にかゝりたるが」

みつかがみ

水鏡(名) 水に物の影をうつして鏡に代用

する事。

みつがね

水銀(名) すゐぎんに同じ。

みつから

自(代) 女の自身を指す詞。わらは。●わた

くし。

みつから

自(副) 人頼みせずして。●己れ直接に。

みつかけ

水影(名) 物の水にうつる影。○源氏「川添

柳の起き伏し靡く水影など」

みつかけるん

水掛論(名) 双方より果てもなく論じ合

ふ事。

みづかげぐさ

水陰草(名) 水に流れよる草。

みづかき

水掻(名) 水鳥の足の指の間にある薄き膜。

浮ぶ時水を掻くためのもの。

みづがき

瑞籬(名) 「一」神社の垣。「二」垂仁天皇の皇

居の名。

みづがきの

瑞籬の(枕) 久しの枕詞。(萬葉)

水瓶(名) 飲料水を入る、陶製の壺。

みづがめ

三柏(名) 紋の名。柏の葉を三つ集めたる

みづがしば

形。

水柏(名) 水草の名。葉は柏に似て花の白

きもの。

みつた

水田(名) 水ある田。

みつたま

水玉(名) 「一」玉の如く丸くな

りて飛び散る水。「二」古代模



様の名。水玉に擬したる形。

(圖)

みつたまり

水溜(名) 雨後などあちこちに溜りたる

水。

みつたみがみ

水玉紙(名) 鳥の子に水を滴りしたる

紙。水玉のやうなる模様ある故の名。

みつたで

水蓼(名) 蓼の一種。水に生ずるもの。

みつたで

水蓼(枕) 水蓼の穗さ掛たる枕詞。○萬葉「水

蓼穗積に至り」

みつつう

密通(名) 男女の私通。△(動)―密通す。

みつづけ

水漬(名) 飯に水を掛けたるもの。

みつつて

水傳(名) 水邊をつたひゆく事。又は其處。○

新六帖「水つての磯間のつゝ咲きしより

海士のいさり火夜さやは見る」

みつつき

承暦(名) 暦の名所。手綱を付くる穴。

みつなほ

水繩(名) 〔一〕水を盛りて物の平準を測る器械。〔二〕麻繩。

みつながし

水流(名) 火災の隠語。(紀)

みつながしは

御綱柏(名) みつのがしはに同じ。

みつなのすけ

御綱助(名) 大舍人助の異名。行幸の時御蓋の綱を取る故にいふ。

みづら

(名) 上古結髪の名。頭の真中より兩方へ分けて左右に一つづいの輪をなし束ぬるもの。

みつむ

見詰(他動下二段) 他へ目を轉ぜずに一物を見る。●長く同じ物を見て居る。

みつうろこ

三鱗(名) 紋の名。三角形を三つ重ねて一の三角形のなしたるもの。●北條鱗。

みつうまや

水驛(名) 〔一〕舟着の驛。●泊り。〔二〕酒肴又は湯漬などのみを以てする簡單の饗應。……多く男諸歌の時にいふ。○源氏「夜

みつうみ

湖(名) 天然の大池。●淡水の海。

みつのにはどり

水鶏(名) くひなに同じ。(草履集) 三の星の位(名) 三公の異名。(四

みつのど

季物語) 癸(名) 干支の最終のもの。●さき。

みつのとも

三友(名) 琴と詩と酒と。●白氏文集に欣然得三友。三友者爲誰。琴罷轍舉酒。酒罷轍吟詩。さあるより来る。

みつのともしび

三の燈(名) 稻荷の三社に奉りたる神燈。

みつのおも

みつのがしは

水面(名) 水の表面。●すぬめん。三角柏(名) 柏の一種。葉の三つ膜に裂けたるもの。上古は盃に代用して酒を盛りたり。

みつのたから

三寶(名) 〔一〕三種の神器。〔二〕三寶。三の玉垣(名) 稻荷三社の玉垣。

みつのたまがき

三車(名) 羊車、鹿車、牛車の三つ。法華經譬喻品に出でたる喩へ。昔し一人の長者ありて子供あまた持ちたるが。俄に大火事

出で來て長者の家まで焼け来る。父の長者早く此家を出でよと子供に勸むれども。はかなき遊戯に心を染めて出でず長者方便を

みつのころも

なして。辛鹿牛の三つの車を作りて與ふべし乗りて出でよといへば子供之に引かれてやうく出でたりとなり。……即ち長者は佛。子供は迷へる衆生。火車にて焼くる家は苦界。三車は佛教方便の喩と知るべし。

三衣(名) 袈裟の一名。青、黒、木蘭の三色にて染むる故の名。

みつのえ

壬(名) 干支の第九に當るもの。●じん。

みつのて

水の手(名) 水を得る道。

みつのあき

三朝(名) 正月三箇日の朝。

みつのみ

水呑(名) 水を呑むためのコップ。

みつのひろま

三の廣前(名) 稻荷三社の神前。

みつのせ

三の瀬(名) 三つ瀬川に同じ。(源氏)

みつて

見付(他動四段) 常に目に觸る。●見馴る。

みつて

見付(他動下二段) 見出す。●見顯はす。●探し出す。

みつぐ

見繼(他動四段) 人の生活を補助する。

みつぐ

水漬(自動四段) 水に浸さる。○續紀宣命「海ゆかば水漬く尸。大君の邊にこそ死なめ」

みつぐろひ

身繕(名) 衣服などを着飾る事。身繕へ。

みつぐりの

三栗の(枕) 中の枕詞。三つある栗の實の

みつぐるま

眞中といふ意味。
水車(名) 水力にて廻るやうに作りたる車。●すゐしゃ。

みつぐらし

水菓子(名) 水氣ある食用の菓物。……蜜柑、柿、枇杷の類。

みつぐらふ

見はからふに同じ。

みつぐさ

水草(名) すべて水中に生ずる草。

みつぐさし

水臭(形。形状言ク活) 「一」食物にて鹽のきかぬ。「二」親しく無い。●冷淡な。●他人らしい。(俗)

みつぐき

水筆(名) 書きたる文字。●手蹟。●筆蹟。

みつぐきの

水葦の(枕) 岡の枕詞。(萬葉)

みつぐきぶり

水葦振(名) 上古雅樂寮の歌曲の名。(古今)

みつぐみ

水汲(名) 水を汲み取る事。又は其人。

みつぐすり

水薬(名) 水に溶かしたる薬。

みつぐや

水屋(名) 「一」神社にて御供水を調する家。「二」茶の湯にて茶器をすすぎ清むる所。「三」氷店。

みつぐやま

瑞山(名) 木のうるはしく茂りたる山。(萬葉)

みつぐまた

三昧(名) 三方へ分れたる所。又は其物。

みつけ

見付(名) 見張番所のある城の門。

みつげむり

水煙(名) 煙の如く立ち上る水。……石を投じたる時など。

みつぷ

密夫(名) 一密通せる男。●まなごい。

みつぶ

密婦(名) 密通せる女。

みつぶね

水船(名) 飲料を貯へたる船。又は之を運ぶ船。

みつぶぶき

水路(名) 鬼蓮の一名。

みつこ

三子(名) 「一」三人同時に同腹より生るゝ事。「二」三歳位の小兒。

みつこ

水子(名) 生れてまだ日数の立たぬ子。●初生兒。●あかこ。

みつこも

水衣(名) 「一」水など汲む時に着る衣。「二」能裝飾の一種。漁夫、樵夫などすべて勞力する賤夫の着るもの。

みつこぼし

(名) 茶の飲みあまりなど捨つるための陶製の器。

みつこんじやうど

密嚴淨土(名) 極樂の一名。(佛教)

みつこし

水瀉(名) 不淨の水を瀉して清潔にするための器械。

みつえ

水枝(名) 若葉したる枝。

みつゑのぐ

水繪具(名) 水彩色に用ふる繪具。

みつて

水手(名) 和歌の文字を水の流などの形に亂し書きたるもの。葦手の類。○著聞「洲濱の心葉に水手にて歌二首」

みつあふひ

水葵(名) 草の名。水葱に同じ。

みつあけ

水揚(名) 「一」植物の水を吸ひ上ぐる事。「二」船の荷物を運び上ぐる事。

みつあぶら

水油(名) 油の一種。女の髪に付くる流動體のもの。

みつあさぎ

水淺黄(名) 淺黄の薄き色。

みつあめ

水飴(名) 飴の一種。水の如く軟かなるもの。

みつざいしき

水彩色(名) 畫にいふ調。淡泊なる彩色。

みつざきあんない

水先案内(名) 船の先に立ちて跡舟を導く事。又は其舟。

みつさし

水差(名) 鐵瓶、土瓶、花瓶などに水を差す陶製の器。

みつぎ

貢、調(名) 「一」租税。「二」外國よりの獻上物。

みつぎ

密議(密) 秘密の相談。●内談。

みつぎ

水城(名) 周圍に堀を掘り水を溜めたる城。

みつぎは

水際(名) 水に接したる處。

みつけ

密教(名) 表面に理義の知れ兼ねるやう深

秘に説きたる教。すなはち陀羅尼を説く教にて眞言宗に屬す。……顯教を參考せよ。

〔佛教〕

みつめ

三日(名) 婚禮の後三日目に當る日。

みつみつし

〔枕〕 久米(姓)の枕詞。(記)

みつみつし

瑞々し(形。形狀言シク活) うるはしく充滿したる有様。

みつし

密使(名) 秘密の使。

みつし

御厨子(名) 〔一〕貴人の使用品なる厨子。〔二〕御厨子所の婢。〔三〕みつしめ。

みつしどころ

御厨子所(名) 禁中にて供御の御膳を調製する所。

みつしよ

密書(名) 秘書の手紙。

みつしらびやう

水白拍子(名) 古代の歌曲の名。

みつじやう

水尺(名) 水中に立て、尺度を記したる杭。

みつしゆう

密教(名) 密教を説く宗旨。眞言宗の一名。

みつしめ

御厨子女(名) 臺所にて働く下女。●飯たき。

みつびき

三引(名) 紋の名。丸に一の字。を三つ引き

みつびき

水引(名) 草の名。秋の頃糸の

如く細き莖に赤く小さき花咲きて其形水引に似たるもの。

みつびき

水引(名) 幕の一種。建物下部に張る短きもの。

みつびき

水引(名) によりに糊を引き紅、白、金、黄な

こに染めて數本集めたるもの。贈物の上包など結ぶに用ふ。

みつもり

見積(名) 見積る事。

みつもり

見積(他動四段) 目で見る餘算を立つる。

みつもの

三物(名) 〔一〕三種の射藝。流滴馬、笠掛、犬

追物。〔二〕三種の料理。吸物、甘露、浸物など取り揃へたるもの。

みつせがは

三瀬川(名) 冥途の道にありといふ川。●

さんづの川。

みつせつ

密接(名) 近く接し合ふ事。△(動)―密接す。

みつせめ

水攻(名) 城の四方より水を浸して攻むる事。

みつぜめ

水責(名) 頭より水を灌ぎて罪人を糺問する事。



みつすまし

水澄(名) 虫の名。色黒くして蜘蛛の如く

脚は四本あり常に水中に浮びて濁り水を澄

ますといふもの。

みね

峯(名)

山の最高處。●いたゞき。

みねいり

峯入(名)

修験者の修行のため大峯に登山す

る事。

みな

御名(名)

〔一〕佛の名號。南無阿彌陀佛。〔二〕(聖

名)神。(基督教)

みな

蟻(名)

になを見よ。

みな

皆(副)

ある限り残らず。●すつかり。●悉く。●

悉皆。●すべて。

みなと

一港。湊(名)

〔一〕水門。〔二〕舟の碇泊所。

みなとふり

湊入(名)

舟の湊に入り來る事。●入港。

みなとち

湊路(名)

湊に行きかふ陸路。

みなとがみ

湊紙(名)

和泉の湊村より出づる紙。

みなとだ

湊田(名)

〔一〕湊に作る田。〔二〕神樂歌の曲

名。

みなとす

湊洲(名)

湊の海中にある洲。

みなり

身形(名)

衣服の風體。

みなる

見馴(自動下二段)

常に見て居る。●見つける。

みなる

水馴(自動下二段)

常に水につかりて居る。

みなほす

見直(他動四段)

〔一〕見て悪しき事を善き方

に思ひ直す。(祝詞式)〔二〕再び見る。

みなわ

水泡(名)

水の泡。●うたつた。

みながら

皆がら(副)

皆に同じ。(雅)

みなかみ

水上(名)

流れの源に近き方。●川上。

みなれぎを

水馴棹(名)

常に水に浸され居る舟の棹。

みなそこ

水底(名)

水の底。

みなつき

水無月(名)

六月の異名。

みなつきはらひ

水無月被(名)

六月晦日にする大赦。

じ。

みならふ

見習(他動四段)

見て眞似する。

みなうら

水占(名)

水邊にてする一種の占。(萬葉)

みなのおた

蜷腸(枕)

蜷さいふ具の腸は黒きものなれ

みなくち

ばかぐろきに掛かる枕詞。(萬葉)

みなくぐり

水口(名)

田へ水を塞き入るゝ口。

みなけ

水潜(名)

水鳥の水をうづく事。(新六帖)

みなごろし

身投(名)

水に身を投じて死ぬる事。●入水。

みなさる

鑿(名)

一人も残さず殺す事。

漲(自動四段)

水が溢るゝ程滿つる。

みなぎは^リ

水際(名) みづぎは。●みぎは。

みなぎら^リ

漲(自動四段) 漲るの延音。

みなみ

南(名) 「一」東に向けて右の方。「二」南風の略。

みなみおもて

南面(名) 家の南向の處。

みなみのきし

南岸(名) 佛の國の一つ。龍女の成佛して生れしさいふ南方無垢世界。(佛敎)

みなみまつり

南祭(名) 男山八幡宮の臨時祭。三月中の午の日に行はる。……加茂の臨時祭を北祭といふに對して。

みなしろ

御名代(名) 名代を見よ。

みなしこ

孤兒(名) 兩親とも死したる小兒。

みなしも

水下(名) 下流。●川下。(拾遺)

みなもと

源(名) 「一」流れ水の發する處。●水上。●

みなせがは^リ

水源(二)姓の一つ。皇族の下りて臣下になる時に賜はるもの。

みなす

水無瀬川(名) 古はすべて水無き川の稱。(萬葉)

みなり

見成(他動四段) 「一」見て其物事となす。「二」假りに其物と定めて見る。

みらい

蕪(名) いらの古名。(和名抄)

みらい

未來(名) 「一」まだ來ぬ時。●今より後。●將

みらい

來。●後來。「二」死しての後。●あの世。●後の世。「三」語學上にて未來の時をあらはす助動詞。

みらい

未來記(名) 未來に起る出來事を想像して記したる書。

みらい

(他動) 見るの延音。見る事の意に用ふ。○續古今「滿つ沙にかくれぬ磯の松の葉も見らく少なく霞む春かな」

みむろ

御室(名) 神の社。

みんぱ

民法(名) 法律の一つ。人民の權利義務を定めたるもの。

みんぱ

民兵(名) 人民を集めて臨時に作りたる軍隊。

みんかん

民間(名) 人民の間。●政府の干渉を受けざる處。

みむね

聖旨(名) 神の意旨。(基督敎)

みんなん

南(名) みなみに同じ。

みむく

見向(自動四段) ふりかへり見る。●其方をもく。

みんけん

民權(名) 人民の有する權利。……官權に對して。

みんぶしやシヨウ

民部省(名) 官廳の名。諸國の年貢、土地の圖、戶口人口等の事を掌るところ。官吏は卿、輔(大少)丞(大少)錄(大少)あり。●民のついで。

民部省(名) 法律上の詞。人民の間に起る訴訟事。人民の行ふ選舉。

みんじ

民事(名) 法律上の詞。人民の間に起る訴訟事。

みんせん

民選(名) 人民の行ふ選舉。

みうち

身内(名) 「一」身體の一部分。「二」一家族又は親類の一部分。

みうちきのひと

御衞の人(名) 天皇に御衣を着せ奉る役の人。

みうらなり

三浦折(名) 折烏帽子の一種。

(圖)

みうけ

身受(名) 遊女などに賣りたる身を請けもどす事。



みの

蓑(名) 雨具の名。葉、茅などを編みて作り身に着るもの。

みのり

實(名) 「一」實る事。「二」特に豐作。

みのり

御法(名) 「一」佛法。「二」官令。

みのりのゑ

御法會(名) 法會。●佛事。(源氏)

みのる

實(自動四段) 實を結ぶ。●實むなる。●豐作を得る。

みのがめ

蓑龜(名) 海に住む一種の龜。蓑の如き尾あるもの。

みのがみ

美濃紙(名) 紙の名。半紙より廣く厚くして美濃産をすぐれたりとするもの。

みのむし

蓑虫(名) 虫の名。木の葉を集めて蓑の如き巢を作り之を木の枝などに懸けて常に其中に住むもの。

みなふ

未納(名) いまだ上納せざる事。

みのやま

蓑山(名) 籠馬樂の曲名。

みのけ

蓑毛(名) 鷲の頭に立てる毛。

みのけたつ

身毛立(自動四段) 身の毛の逆立つ心地する程ぞとする。

みのぶ

見延(他動下二段) 遙に見やる。●目を延ばして見る。(源氏)

みのしろ

身代(名) 身を賣買する代金。

みのしろころも

蓑代衣(名) 蓑に代用したる衣。(歌詞)

みのも

水面(名) 水のおも。●水の上。●すゐめん。

みにく

御國(名) 「一」我國。●皇國。「二」天國。(基督教)

みくにつたはりのり

(名) 三國傳來の法の直譯、印度

支那日本の三國に傳來する佛法。

みくにぶり

御國風(名) 日本固有の風。

みくにゆつり

御國讓(名) 天皇の御讓位。

みくり

三稜(名) 水草の名。莖は三角にして夏の頃紫色の花咲くもの。簾などに作る。

色の花咲くもの。簾などに作る。

みくり

御厨(名) 神供を調ふる厨。

みくるべかす

(他動四段) 眼をざら／＼として見廻はす。●怒り睨む。(空穗)

みぐるし

見苦(形。形狀言シタ活) 醜し。

みくだりはん

三行半(名) 妻を離縁する時の書付。●去狀。三行半に書く例あり。故の名。

みくだす

見下(他動四段) 見て輕蔑する。●下目に見る。●見下ぐる。

みくづ

水厩(名) 水中の塵芥。

みくら

寶座(名) 神の居所。(基督教)

みくまり

水分(名) 雨を降らせて水を分配する事を司る神。

みくまの

三熊野(名) 三は眞の意。○紀州熊野の美稱。……後世は熊野三山の意に附會す。

みくさ

眞草(名) 草の美稱。●萱(萬葉)

みくさ

水草(名) 水に生ずる草の總名。

みくじ

御斷(名) 神に判斷を請うて引く籤。吉凶の記し附けてあるもの。

みぐし

御首(名) おん首。●おつむり。

みぐし

御髮(名) 髮の敬語。

みくしげの

御櫛司殿。御匣殿(名) 「一」禁中にて御装束を調製するところ。眞觀殿の一名。……轉じては大臣家にくもいふ。「二」内侍の異名。

みぐしあげ

御髮上(名) 「一」儀式の時貴女の御髮を上げて結ぶ事。「二」又は之を上ぐる役の女官。

みや

宮(名) 「一」禁裏。●内裏。「二」皇后、中宮、皇子、皇女の住み給ふ御殿。「三」皇后、中宮、皇子、皇女の尊稱。「四」神社。

みやゐ

宮居(名) 神社のあるところ。●社地。●社。

みやいくさ

宮軍(名) 皇子の赴し給へる戦争。

みやばら

宮原(名) 宮たち。

みやばら

宮腹(名) 皇女の御腹。●皇女の所生。

みやぢ

宮路(名) 「一」禁中又は宮様の御殿へ參上する道。「二」神社に參詣する道。

みやぬし

宮主(名) みやじに同じ。

みやる

見遣(他動四段) 遠方を見渡す。

みやづかへ

宮仕(名) 〔一〕男女とも宮中に奉仕する

事。〔二〕轉じては貴人の前に仕ふる事。

みやづかへびと

宮仕人(名) 宮女。●官女。

みやづかさ

宮司(名) 皇后職・中宮職の官吏。

みやづこ

(名) 〔一〕(御奴)我天皇陛下の御民。特には

朝廷に奉仕する官吏。〔二〕(造)上古一種の

官名。一國を統治するものを國造といひ

職業によりて其一部族を統治するものを伴

造といふ。〔三〕(宮)子・神主。●神官。

みく

脈(名) 體中にありて血液の循環する管。

みくばく

脈搏(名) 血液の循環によりて起る脈管の鼓

動。

みくらく

脈絡(名) つきあひ。●連絡。

みやま

(名) 〔一〕(眞山)山的美稱。〔二〕(深山)深き山。

みやまわり

宮參(名) 〔一〕神社に參詣する事。〔二〕小

兒生れて初めて産土の神に參詣する事。

男は三十二日目、女は三十三日目。

みやまべ

深山邊(名) 深山のほとり。

みやまがらす

深山鴉(名) 烏の一種。深山の岩穴など

に住むもの。

みやまだ

眞山田(名) 山田に同じ。(萬葉)

みやまら

深山里(名) 深山の山家。

みやまざくら

深山櫻(名) 深山にある櫻の木。

みやまき

深山木(名) 深山に生ひたる樹木。

みやけ

屯倉。屯家(名) 古へ朝廷の御料地より得たる

稻を納め置きたる藏。又は其役所。

みやけ

土産(名) 人を訪問する時又は旅より家に歸る

時に携へ行く贈物。

みやぶ

(自動上二段) みやびやうである。

みやぶる

見破(他動四段) 人の隠せる物事を見顯は

す。●見抜く。●見通す。

みやこ

都(名) 〔一〕皇居の所在地。〔二〕京都。●西京。

みやこぼろ

〔三〕神佛などの住み給ふ國。

みやこぼろ

都邊(名) 都の近邊。

みやこぼろ

都誇(名) 〔一〕都に住む身の自慢。○大

鏡「下臈なれども都はこりさいふ事も侍れ

ば」〔二〕旅人が都近く歸り來て心丈夫にな

りたる餘り威張る事。○土佐「みやこぼろ

りにもやあらんからくしてあやしき歌一つ

ひれり出だせり」

みやこべ

都邊(名) 都のほとり。

みやこどり

都鳥(名) 鳥の名。鶇の類。全體白く嘴と

脚を赤くして川に住むもの。

みやこぢ

都路(名) 「(一)都に上るための道路。(二)都

の中にある道路。

みやこつり

都移(名) 遷都。

みやでら

宮寺(名) 僧の奉仕する神社。

みやさま

宮様(名) 皇后、中宮、皇子、皇女の尊稱。(俗)

みやぎ

宮木(名) 宮を建築するための材木。

みやめぐり

宮巡(名) 諸社を拜み廻る事。

みやじ

宮主(名) 神祇官の重職にして卜部の事に堪へたる人の特に任ぜらるるもの。大嘗會などの時秘事口傳を受けて之に奉仕す。

みやび

雅(名) 風雅。●風流。●上品 ●優美。

みやびと

宮人(名) 「(一)宮に仕ふ男女の總名。(二)宮司。(三)神主。●神官。

みやびとぶり

宮人振(名) 上古雅樂寮の歌曲の名。

みやびな

風流男(名) みやびやかなる男。●風流人。

みやびやか

●風雅人。

みやもり

ひやびなる有様。(形)―みつびやかなる。

みやすどころ

(副)―みやびやかに。

みやす

宮守(名) 神社の番人。

みやす

御息所(名) 「(一)禁中にて天皇の御休息

所。(二)女官。更衣の尊稱。(三)皇太子お

よび親王の奥方。

御息所(名) みやすどころに同じ。

みやすし

見安(形。形狀言ク活) 「(一)見ぐるしからず。

みまひ

(二)見ふ事のたやすき。

みまぢ

見舞(名) 「(一)見舞ふ事。(二)見舞に贈る品。

みまか

已待(名) 己巳の日に行ふ辨天の祭。

みまそが

(自動四段) 死ぬる。

みまそが

(他動四段) まします。●おはします。い

まそがるに同じ。○伊勢「昔し田村の帝

と申すみかどみまそがりけり」

みまん

未満(名) いまだ満ちざる事。●不足のある事。

みまふり

見舞(他動四段) 人の安否を尋ねる。

みまうし

(形。形狀言ク活) 見る事のうき。●見る事の

みやの

いやな。

みまの

御孫命(名) 天孫。●天皇。

みまき

御秣(名) 貴人の馬に食ます草。(雅)

みまや

御殿(名) 貴人の殿。

みまへ

御前(名) おん前。●ごぜん。

みまさか

美作(名) 催馬樂の曲名。

みまし

御座(名) 貴人の座し給ふところ。又は敷く物。

みまし

汝(代)

いましに同じ。(古)

みけ

御饌。御飯(名)

〔一〕天皇の供御。〔二〕神の御供。

みけ

三毛(名)

猫の毛色。白黒茶の三色入り雜りたるもの。

みけつかみ

御食津神(名)

食物を司る神。豐宇氣姫の一名。

みけつくに

御食國(名)

御饌の米を奉る國の意。◎天皇の統治し給ふ國。(古)

みけん

眉間(名)

眉と眉との間。

みけこも

御食薦(名)

神を祭る時供物の下に敷く薦

みけし

御衣(名)

貴人の着給ふ衣。●みづ。●おめし。

みけびと

御食人(名)

天皇又は神に奉る魚鳥など捕る人。(古)

みけもの

御饌物(名)

御饌に奉る物。

みぶ

御封(名)

封戸に同じ。(雅)

みぶるひ

身震(名)

身を震はする事。

みふた

御札(名)

〔一〕神社の字札。〔二〕御籍。御簡

みぶん

身分(名)

〔一〕尊卑に従ひての身の分限。〔二〕

日給のふだの略。

よき身分。

みふき

(名)

御壽の意。おん祝。(祝詞式)

みふゆ

三冬(名)

〔一〕冬の美稱。〔二〕轉じては冬三箇

みこ

御子(名)

〔一〕子の尊稱。〔二〕皇子。天皇の御子。

みこ

神子。巫女(名)

神に仕へて祈禱を爲し、神慮を伺

みこ

稗心(名)

ひ、又は神樂を舞ふ女。

みころし

稗心(名)

救ふ能はずして見すゝ死に至らしむる事。

みこと

命。尊(名)

神、皇族、貴人の尊稱。……天皇もし

みこと

御言。命(名)

天皇又は神の仰せ。

みこと

見事(名)

見るべき目的の物。●見物事。○徒

みこと

然「見事いさ遅し」

よく出来たる事。●巧み。●上手。●立

みことば

聖言(名)

神の言葉すなはち聖書。●バイブ

ル。(基督教)

みこどり

鴉(名) 鳥の名。しこい。◎鴉の字を分ちて

聖鳥と爲し直譯せしもの。(枕)

みこのり

詔。勅(名) 天皇の仰せ。●詔勅。●勅語。

●勅諭。●宣命。●宣旨。

みこむち

幸。司(名) 地方官。(雅)

みこむ

見込(他動四段) 「一」見入る。●外より内を

見る。「二」目的を立つる。●概算する。「三」

望を屬する。

みこみ

見込(名) 見込む事。

みこし

御輿(名) 「一」貴人の乗り給ふ輿。「二」祭禮の

時。神靈を載せて昇き行く輿。

みこしろ

御千代(名) 千代を見よ。

みこしち

三越路(名) 「一」越路の美稱。「二」轉じては

越前と越中と越後三箇國の意。

みこも

水菰(名) 菰に同じ。(歌詞)

みこもり

神の名。水分に同じ。……後世誤り

す。

みこもる

水籠(自動四段) 水中に隠る。(雅)

みこもる

身籠(自動四段) 奸身する。●懷妊する。

みこす

見越(他動四段) 物を越えて向ふを見る。

みえ

見込(名) 外部より見たる様。●みつき。

みえい

御影(名) 神佛の畫像。

みえいだう

御影堂(名) 御影を祭る堂。

みへいつへ

三重五重(名) 古代織物の一種。綾の類。

みへいつへぎぬ

女裝束などに用ひたるもの。

みえいく

御影供(名) 三重五重にて織りたる衣。

みえがくれ

見隠(名) 見えたり隠れたりする事。

みへがさね

三重重(名) 檜扇の兩方の端の板を三枚重

ねて薄様にて包みたるもの。

みへだすき

三重襷(名) 古代模様の名。三線の交叉し

たるもの。裝束などに用ふ。

みへのおふぎ

三重扇(名) 三重がきれに属す。

みえぐるし

見苦(形。形狀言シク活) 見らるゝ事の苦

しい。(源氏)

みて

聖手(名) 神の工。(基督教)

みてぐら

幣帛(名) 「一」神に奉る物の總名。「二」神樂

みてぐらつかひ

歌の曲名。幣帛使(名) 天皇より神に幣帛を奉ら

せ給ふ勅使。●奉幣使。

みあひ

見合(名) 見合ふ事。

みあはせ

見合(名) 見合はする事。

みあはす

見合(他動下二段) 「二」双方より見る。

「二」照らし合はす。●見くらべる。「三」實行せんと期したる事を都合にて延ばす。

みあれ

御生。御形(名) 四月中の午の日(葵祭の初日)に行はるゝ加茂社神事の名。又は其日の稱

へ。……一説には加茂に祭られ給ふ別雷神のうまれ(あれ)給ひし日といふ意味。又一説には此日に裝飾して渡し奉る御輿の事なる。又一説には此日大櫛の枝に色々の絹・鈴など附けて飾りたるもの。此鈴の緒を參詣の人々引き鳴らす。○源氏「對の上のみあれに詣で給ふさて」夫木「思ふ事みあれのしめに引く鈴のかなはぬはよもあらじさうおもふ」謡曲「加茂のみあれに飾りしは絲毛の事こそ聞け」

みあれの

御生野(名) みあれの祭をする社の野邊。●

みあれやま

加茂の社内の野。(風雅)
御生山(名) みあれの祭をする社の山。●
加茂の社の山。(千五百番歌合)

みあらか

御殿(名) 神又は貴人の御殿。(祝詞式)

みあふ

見合(自動四段) 「二」双方より相見る。「二」くらべ見る。

みざ

聖座(名) 神の居所。(基督教)

みさい

御齋會(名) 中古禁中公事の名。正月八日より七日間大極殿にて最勝王經を講ぜられたる儀式。

みさい

京(名) 京都。

みさな

操(名) 一の正しき心を守りて變へぬ事。●節操。●貞操。

みさな

眞青(名) 極めて青き事。●まっさを。△(形)みさななる。(副)——みさなに。○俊賴「あはれにもみさなに燃ゆる壁かな聲立てつべき此世と思ふに」

みさな

水槨(名) 船の槨。

みさかり

(名) 量盛に同じ。△(形)——みさかりの。(又)みさかりなる。(副)——みさかりに。

みさく

(他動下二段) 遠く望む。

みさく

見下(他動下二段) 下目に見る。●輕蔑する。●見下す。

みさやま

御射山(名) 御射山祭を行ふところの山。(玉

葉

みきやねみきり

御射山祭(名) 信濃の國の諏訪神社に

て七月二十七日に行はるゝ神事。此日神殿を薄にて葺く事あり。よりに穗屋作の神事と稱ふ。

みきぶ

(自動四段) 水に鏝の生ずる。

みきぶ

水鏝(自動上二段) 水鏝が浮く。

みきぶ

鴨(名) 鳥の名。鷺の類にて小さく常に水際に

住みて魚を取り食ふもの。

みきぶ

陵(名) 天皇、皇后の御墓。

みきぶ

御前(名) 前驅。●さきばらひ。

みきぶ

御崎(岬)(名) 海中に突き出でたる山の鼻。

みきぶ

(副) 水にびしょ濡れたる有様。(宇治)

みきび

水鏝(名) 水面に浮ぶ鏝。

みき

幹(名) 木の身體となる部分。

みき

御酒(名) 「一」酒の尊稱。「二」神に供ふる酒。「三」(造酒)造酒司の略。

みき

右(名) 「一」人の箸箒など持つ手の方。「二」上。

●優等。○「人の右に出つ」「三」右の字の附く官。……右大臣、右近衛などの類。「四」雅

樂にて高麗樂。……右方を見よ。

みきども

右巴(名) 紋の名。右の方へ卷きたる巴。

みきり

砌(名) 家の軒下に石を敷き並べたる處。

みきり

砌(名) 時候。●頃。●折。●時節。

みきり

右(名) みきの古言。

みきる

見切(他動四段) 見限る。●あきらむる。

みきなり

右折(名) 折烏帽子の一種。其端を右の方に

折りたるもの。平家は家例として此製を用ひたり。

みきはり

汀(名) 水の陸と接したる處。

みきはむ

見極(他動下二段) 「一」深く立ち入りて見る。「二」見分くる。

みげ

御教書(名) 院廳、關白、將軍より下さる令文。

みぎん

砌(名) 時候。●頃。●折。●時節。

みきのつかさ

造酒司(名) 掃部寮に屬して禁中所用の酒を造る事を掌る役所。官吏は正、佑、令史あり。●酒のつかさ。

みきき

見聞(名) 見る事と聞く事と。●けんぶん。

みゆ

御湯(名) 温泉の美稱。(萬葉)

みゆ

見(自動下二段) 「一」自然に見らるゝ。「二」見ら

るい。○源氏「口をしうは見えじと思ひ勵みて」

みゆるす

見許(他動四段) 許すに同じ。

みゆづる

見讓(他動四段) 讓るに同じ。(雅)

みゆき

行幸。御幸(名) 天皇の御他行。

みゆき

(名) 「一」(眞雪)雪の美稱。「二」(深雪)深き雪。

みゆめ

妃(名) 皇族の奥方。

みゆめ

見目(名) 「一」目にて見たるところ。●見え「二」顔みたち。

みゆめ

未明(名) 未だ夜の明け切らぬ時刻。●明方。

みゆめ

見愛(他動二段) 見て愛する。●見て戀慕する。(記)

みゆめ

見廻(他動四段) 見まはす。●あちこちを見る。

みみ

耳(名) 「一」顔の左右兩端にありて音響を聞く機械を具へたるところ。「二」聞く事。「三」すべて耳の如く物の端に附き又は耳に似たる形を有せるもの。

みみはさみ

耳挿(名) 「一」古へ女の髪に垂れかゝるをうるさびりて兩耳より前へ來ぬやうに挿み置く事。(源氏)「二」又之を防ぐために

みみどなる

耳に挿み置く袋の如きもの。身身と爲る(句) 身二つに爲りて分焼する意。(平家)

みみわ

耳輪(名) 耳朶に下ぐる飾りの輪。

みみより

耳寄(名) 耳の自然に寄るほど聞きたき事。

みめ

○「耳よりの話」

みめ

微妙(名) 「一」すぐれたる事。●たへなる事。「二」佛徳の圓滿莊嚴なる事。(佛教)

みみたり

(名) みみだれの古言。(和名抄)

みみだれ

(名) 病の名。耳より濃汁の出づるもの。

みみだらひ

耳鹽(名) 角のある鹽。

みみたぶ

耳朶(名) 耳の下部に垂れたる肉。

みみつく

耳木莖(名) 鳥の名。鼻に似て耳の如き毛の立ちたるもの。

みみつき

耳附(名) みみよりに同じ。(狹衣)

みみなぎさ

耳葉草(名) 草の名。葉は耳の如く葉長く蔓草に似て春の頃茂り白色の花咲くもの。

摘みて野菜とす。

みみらくのしき

耳樂島(名) 肥前松浦郡にありて死人の常に顯はれて父子相見るを得るさ傳へたる島。○蜻蛉「何處さか音にのみ聞くみいら

くの島がくれにも人を奪れん」

みみうち

耳打(名) 人の耳に口を接して小聲にて話す事。●耳語。●さいやま。

みみくせ

耳癖(名) 耳の癖。●聞き癖。

みみふる

耳舊(自動上二段) 耳に舊くなる。(源氏)

みみさき

耳聞(名) 耳にて人の密語など聞き出だす事。○盛衰「此禿の體こそ心得れ。たゞひ京中の耳さきの爲めなりとも喉嚨通の童にてあれかし」

みみゆ

見見他動下二段 まみゆに同じ。○謡曲「花

の都人に耻がしながら見々えん」

みみしひ

蟬(名) つんば。

みみず

蛭蚓(名) 虫の名。體は丸く長くて土中に住み。又地上に出てゝは體を伸縮しつゝ這ひ

あるくもの。

みみずがき

蛭蚓書(名) 蛭蚓の這廻るが如き文字の書き方。拙なき書をいふ。

みじろく

(自動四段) 身動をする。(雅)

みしど

(副) 物の固着する存様。●ひしど。●ひたど。

みしほ

御修法(名) 禁中公事の名。古へ正月七日より一七日の間眞言院にて行はれたる佛法の御

みじかむ

短(他動下二段) 短くする。

みじかうた

短歌(名) 三十一文字の和歌。

みじかやか

短き有様。(形)「みじかやかなる。(副)「みじかやかに。(雅)」

みじかし

短(形。形狀言ク活)「一」長さ、高さ、時間など量の少きをいふ。「二」心の拙なき。「三」短氣なる。「四」自分の卑しき。

みしね

稻(名) 稻の美稱。

みじくる

(自動四段) みじろくに同じ。(枕)

みしまごよみ

三島暦(名) 應神の頃伊豆の三島神社より出だしたる一種の暦。細き假名書にしたるもの。

みしまゆふ

三島木綿(名) 織物の名。伊豆の三島より出る木綿。(神樂歌)

みしぶ

水澁(名) みさびに同じ。

みじゆく

未熟(名) 充分に發達して居らぬ事。△(形)「未熟なる。(又)「未熟の。(副)「未熟に。

みしし

(副) 物など毀ち破ぶる音。又は物の毀たれんさするやうなる音。(又)「みし／＼」。

みもひ

(名) 水の美稱。飲料とする時の名。○催馬樂

「飛鳥井にやごりはすべし陰もよしみもひも寒し御馬草もよし」

みもろ

御室(名) みもろに同じ。

みもち

身持(名) 姪身。

みもの

見物(名) 「一」見物すべきもの。「二」見て立派なるもの。

みものおもひ

御物思(名) 天皇の御喪。●諷聞。

みせ

店(名) 賣買の物品を陳列せる場所。又は其家。

みせん

蜜煎(名) 古代食品の名。甘葛^{あんぎや}を煮出して製した甘き汁。物の味附などに用ひたるもの。

みせざや

見鞘(名) 短き腰刀に長き鞘袋を付けて長き刀の如く見たるもの。

みせぎぬ

見せ端(名) 御所車にいふ詞。下簾^{したすだれ}を簾の内へ入れて懸けず簾の外より懸くる事。

みせしめ

(名) 悪人を懲らして他の人の戒に見する事。

みせびらかす

(他動四段) 誇り顔に見する。

みせびらき

店開(名) 初めて店を開く事。●開店。

みせもの

見世物(名) 木戸を打ちて公衆の人に見する物。又は其興行。

みす

簾(名) すだれに同じ。

みす

御巢(名) 籠の上的烟り出し。(記)

みす

見(他動下二段) 見しむる。●示す。

みすむじん

御隨身(名) 隨身の尊稱。……隨身を見よ。

みすぼらし

(形。形狀言シク活) 見ばえの無き。●貧乏らし。

みすり

眞摺(名) 衣に色を摺り付くる事。○夫木「花のみすりの狩衣」

みすつ

見捨(他動下二段) 見切る。●見かざる。●見放す。

みすまる

御統(名) 數珠の如く多くの玉を糸に貫きたるもの。上古の裝飾品。

みすぎ

身過(名) 世渡り。●生活。

みすみす

見す見す(副) 目前にありながら。●見て居りながら。●見る／＼。

みすずかる

水簾刈(枕) 信濃の枕詞。(萬葉)

